

研修報告書No.18

所属：県外大学病院研修医

平成29年12月から30年1月の2ヶ月間、高知県高岡郡の梶原病院を中心に、周辺の診療所（四万川、松原、大崎、杉の川）を合わせて研修させていただきました。宮城出身で大学から上京した自分は、お世話になった指導医の先生が生まれ育った県、という理由で研修先を選びましたが、結果的には高知県でまとまった期間を過ごすことができ、ほんとうによかったと振り返っています。

何よりも印象的だったのが、出会う方々が例外なく旅行者である自分をやさしくもてなしてくださったことで、四国のお遍路文化が背景にあるかもしれないとも伺いました。慣れない土地でしどろもどろしている自分に笑って声をかけ、どこにいくといい、何を食るといい、と沢山教えて下さるので、比較的早い段階で高知県が自分の土地のように思えてきた気がします。～き・～ろう・～ちゅうなど、初めて聞く梶原のことばは高知と愛媛が混ざったものと教わりましたが、とても人懐こい印象を受け、自分も（当たっているか自信はないものの）積極的に使うようにしてみました。

実習期間と年末年始がちょうど重なったこともあり、種々の行事にも参加できました。特に印象深いのが病棟詰所（の控室）での年越しで、上の先生・夜勤の看護師さんと持ち寄りご飯を食べながら紅白歌合戦を鑑賞したのはなんとも風情がありました。

大学のような規模の大きい施設では疎遠になりがちなことも多く経験できました。ひとつは傷の処置で、毎日続けて診ることで、基本的ではあるものの傷がいかにかかっているのかを学ぶことができました。処置を媒としながら、同じ患者さんとお話できるのも面白く、傷の処置のような簡単な対応ひとつでも、医師に対する信頼度が変わってくるのだと実感しました。もうひとつは医師以外の職種の仕事で、レントゲン・CT・検体検査などに加え、薬の処方や一包化まで実際にやらせていただくことができました。梶原病院では当直帯に薬剤師さんや技師さんが不在になるため、それが必須の技術になります。パソコン上でオーダーを入れれば結果が出るのをなんとなくあたりまえに感じてしまっていたのですが、中でどういうことが行われているのか身をもって体験したことで、医師の立場としてこれは気をつけよう、最低これくらいは時間がかかるものだ、など心がけるきっかけになりました。

そうした梶原では、皆が皆のことを知っているようでした。毎週行われるケアプラン会では、医療・看護・行政・福祉など多職種共同で各ケースへの支援策が話し合われましたが、「〇〇さんは××さんの叔父さんだから、その奥さんの△△さんの定期受診のときに話をきいてみましょう」などといった会話があたりまえのように交わされるのが驚きでした。都内で救急外来に入っていると、いまにも死にそうな状態になって初めて搬送されてくる高齢者を沢山目にしました。そうした状況に陥る前に拾い上げることができる、というこ

とがすでに新鮮な気づきでした。人と人の繋がりがそれを可能にしているとして、関係は決して自然に生じるだけのものでもなく、例えば支援センター主催の住民交流会など、トップダウン・ボトムアップ双方の努力がはらわれているのだともわかりました。総人口 3000 人程度で他地域から山林で隔絶された梶原だからこそできることなのかもしれませんが、それでも、病院と地域がここまで滑らかに繋がることできるということは、今後自分が臨床を行っていくうえで一つのモデルにしたいと思いました。その上で、東京に戻ったとしても、一人の患者さんを支援していくために必要なパーツを、なるべく自分の眼で見るように心がけていきたいと思いました。

ほんとうに楽しく、心安らぐ 2 ヶ月間でした。自分をもてなしてくださった全ての方々、ありがとうございました。自分も同じように誰かをもてなせるよう、精進したいです。ゆくゆくは高知での生活も検討中です。